

家族と家族幻想 5

坂口 伊都



「嘘はついてはいけません」と小さい頃、誰もが言われたことでしょう。

日々の生活の中で、嘘がない日はあるか考えてみた。コミュニケーションを円滑に回そうとすれば、多少の嘘が混じる。謙虚と言い換えてもいいかもしれない。相手を傷つけないための嘘もいっぱいある。

皆さま、お元気でしょうか。会話を楽しみながら食事をする日が待ち遠しいです。政治主導の仕方に信頼がおけない出来事が重なると不信感ばかり募ります。80代の母親と会うのも気が引けますが、オンライン通信機器が使えない母親との連絡手段は、電話か会うぐらいしかありません。会わないのも会うのも気を遣います。高齢の母の前ではできるだけマスクを外さないようにと思っている矢先に隣で夫がマスク外していたり、コロナ禍でのGo to キャンペーンなど、危機感をどこまで保持したらいいかわからないことがたくさん起こり、世の中全体が突っ込みどころ満載だと感じます。

一人暮らしをしている21歳の息子もコロナ禍の影響を受け、社会という荒波の中で、何とか自分の生活を成り立たせようともがいています。その様子は危なっかしく、じっと見ているとハラハラして仕方がありません。親は息子を遠目で見守っていますが、本人は見守られていることに全く気付きません。ふとした時に思い出してもらえるように連絡を入れ、手助けをしてもらえるというサインを送り続けています。息子は、「帰るわ」と

終わりが見えないてこない新型コロナ禍の日常も1年になり、気持ちが落ち着かないままですが

言いながら、帰らないことが続き、我が家では「兄ちゃんの帰る帰る詐欺」と呼ばれています。その息子が、ほんの1時間程度ですが帰ってきました。髪を染めた息子を見るのが初めてだったので、見慣れないなあという感じでしたが、前向いて生きようとしていることは伝わってきました。親として、不安はありますがそれを信じようと思います。

娘は、息子とタイプが全く違い、何かあると相談してきたり、上手におねだりもしてきます。いろいろな話をしてくるのですが、私の聞こうとするタイミングと合わない、「ねえ、聞いている？」とよく怒ります。しっかり聞くことができたなどという時は、あまり気にならないのか覚えていないようで、聞いていないことばかり話題にされ、何か不条理だと感じます。同じ両親に育てられた子ども達でも成長の道は随分と違うものです。常識を横に置き、その子の状況に応じていくことが、繋がっていく秘訣のようです。離れて暮らしていても家族です。日常の世話をしているわけではありませんが、見守り続ける存在として居続けていることを子ども達も、わかってくれているのではないかと思います。心配をしたらキリがありませんが、何とか周りの人の手を借りながら生きてることを頼もしく感じます。どの子も自立を見据えながら関わっていくことが、今の私に課せられた親役割のようです。何が正解かわかりませんが、子どもとの距離感、支える形は一つではないと教えられています。

子どもが小さい頃、家族は親密な存在で、思春期に入って行くと、家族から距離を置こうとします。親にも言わないこと、嘘をつくことがあります。嘘をつくと言われると、悪いイメージを抱く人は多いでしょう。子どもにも嘘をついてはいけませんとよく言いますが、日常生活の中で本音をぶつけあっていたら関係がすさんで仕方がなくなります。私たちは本音と建前を使い分け、相手のことを思って口にしなかったり、言葉を選び、そして小さな嘘が混ざっていきます。

外に出る時、私たちはよそ行きの顔になります。腹が立っても笑顔でやり過ごすこともあるし、泣きたい気分の時でも何も起きていないかのように平然としています。他者から自分がどう見られるかは多少なりとも気になり、良く評価されたいと願ひ、嫌なことを言われてもグッと我慢した経験は誰にでもあるでしょう。

一方家では、そのよそ行きの顔を止め他者を気にするモードも緩みます。気が緩んだ自分でいられる場所に一緒に暮らす家族は、本音で付き合える相手として認識してしまう。だから家族には嘘をついたらいけないと思う。ある人は、家族に正直でないといけなないと思ひ、家族の質問に正直に答えると叱られ、罵られ、「やっぱり私はダメなのだ」と傷ついていていました。家族に正直に言うといつも罵倒され、何でわかってもらえないのかと傷ついて、家族に誠実であろうする程、悪循環が起きていました。



私たちは無意識的に、家族だからこそ距離が近く、関係を保つために本音でぶつかり合わないようにはしていないのでしょうか。子どもが一所懸命作った工作がさほど上手くなくても、上手にできたねと言ったり、親に何か用事を頼まれて、やりたくなかったら聞こえない振りをしてみたり、何かトラブルがあっても心配をかけたくないからと言わなかったりします。

家族に真実を言わないと嘘をつくことになると罪悪感を抱いているという方に、何故そう思うのかを尋ねていきました。真実を告げた時と言わなかった時の家族の反応はどうなるか、その時、家族は何を不安に感じていると思うか、不安になった時にその家族はどうなるか等をその人と一緒に考えていきました。その結果、家族に言っても大丈夫なことと、あえて言わないでおくことがあってもいいのではないかとなりました。家族に何をしていたかと質問され、自分の行動を正直に報告しない以外の選択肢があることに驚きを隠せない様子でした。

思春期になれば、親に隠し事の一つや二つして当たり前です。家族同士だったら、相手のことを何でも知っているわけではなく、日常を穏やかに過ごすために当たり障りのない話題を無意識に選ぶスタイルが馴染んでいるかもしれません。改まって話をするタイミングを見つけることに苦労したという話も聞きます。「家族だから」と始まる話の中には、家族の誰一人幸せにならない内容が含まれています。まるで落とし穴のようです。



家族だから仲が良くて当たり前。

「家族なのだから、わかってくれるはず。」

「言わなくても伝わるのが家族。」

そんな風に思いながら、仲良くしているために、結局肝心なことを話さないようにしているのが家族なのかも知れない。

仕事の中で、いろいろな家族に出会って話をしていると、家族が特別な存在だということと家族だから自分を理解してくれたり、わかりあうことはイコールではない現実が見えます。どこかで家族なのだからわかりあえるはずという願望は捨てられず、わかってもらえないことに傷ついています。家族は万能ではないと感じます。

家族面接では、家族に焦点を当てて話を聞いていきます。「どなたからでも結構ですので、ご家族のことを紹介してください」と尋ね、ジェノグラムを書きながら、「お子さんの名前はどのように決めたのですか？」や「それはいつ頃のことですか？」「その事柄は、〇さんには伝えているのですか？」伝えていけば、「それはどのように伝えました？」伝えていなければ「それは何故ですか？」等、家族がどう機能しているのかを考えながら質問をしていきます。そんな初回を終え、2回目にお会いする時、「こんな風に家族の話をしたことがなかったので良かった」と感想を言われる方が多

いです。あまり話しに参加していなかった印象だった方にも言われ、驚くこともあります。

家族で話をするとなぐ喧嘩になって話し合いにならないが、家族面接のように第三者が入ることで、冷静に話ができるようになり、他の家族がこんなことを考え、言葉にするのかと意外に感じることも多いようです。普段は家族で会話をしても、肝心なことは言わなかったり、一緒に住んでいても顔を合わすことも稀で、会話は日に一言二言あるかどうかくらいだと話す家族もいます。日常を共にする家族は、関係が近い分、しんどい内容になると波風が立ち、穏便な生活が続けられなくなるから避けたくなり、家族で話す内容は日常生活に差し障りのないものに偏りやすくなるようです。

その中で、家族の会話の影響を大きく受けるのは子どもです。ある家族は、子どもが過去の許せない出来事を話すと、親が「それは、〇〇だった」と訴えを曲げ、あたかも大したことがなかったように笑いながら答えると、子どもが「殺意しか出てこない。この人を本気でぶん殴っていいですか」と訴えてきたことがありました。私は、「物騒な言いまわしですね」と言うと、いつもこんな感じのコミュニケーションで、他の家族でも似たようなものだと思うと返ってきました。親の方には「深刻な場面でもよく笑っている印象を受けますが、いつも笑っていることが多いのですか？」と尋ねると、ご本人がハッとされたようで、考え込みながら自分に自信がないから笑うのかも知れませんでしたと答えられました。

この家族と面会を重ねた終盤、子どもに「親の期待を一人で背負ってきたのですね」と伝えると、「自分で背負ったのではなく、気づいたら肩の上に乗っていて、どうしようもできなかった」と言い、その言葉を両親が噛みしめるように聞いていました。聞いてもらうということは、受け止めてもらうということです。この家族がお互いの話を聞き、それを受けとめ、そして相手のことを思いやりながら話をするようになり、その頃には、子

どもの口から物騒な言葉は出てこなくなっていました。家族が強くなるというのは、こういう事なのだろうと感じました。家族からは、第三者として私があると落ち着いて話し合いができるから、面接を続いたと言われましたが、私はその時、同席する以上の役割をしていなかったのだから、何か聞いてもらいたいと思うことができたなら、連絡をくださいと伝えました。家族の皆さんも納得して面会を終えました。

自分のこと、家族のこと。

それらを誰と語り合っているだろうか。

自分のことも家族のことも案外と見えにくい。近過ぎるものは、誰かの手を借りて客観的に見つめてみると、意外な一面が見えてくるようです。

私達は、自分のことや家族のことをどれくらい話題にしているのでしょうか。私も娘と里親をしていることについて真正面から話をしてこなかったことに講演の打ち合わせをして、初めて気づきました。自分の頭の中では、何度も悩み考えていましたが、それを誰かと話すことはさほどしていませんでした。自分の内に秘めた想いを言葉にする自信も、相手に誤解がないように伝えられる自

信もなかったからだと思います。

夫婦だから何でも話し合えるわけでもないように思います。夫婦で家族が上手くいかない部分の話しをしようとしても、喧嘩になるか、喧嘩になるぐらいなら何も言わない方がマシと黙ると、空気が重くなっていきます。私からの質問にはろくに答えない夫ですが、改まった場所で、同じことを別の立場の人に尋ねられて話す夫の姿を見たことがあります。夫は自分との距離が近い人ほど、あまり気持ちを言わなくなるように見えます。夫婦で会話をするのも難しいものです。

自分を色に例えると何色ですか？と尋ねてみると、考えたこともなかったと言われ、他の家族を色に例える方がすぐに言えることが多いです。自分や家族のことを考えてみようとしても、自分一人では袋小路にはまっていくようで上手くいかず、自分にまつわることは、わかっていそうで実はわかりにくく、言葉にすることが難しいようです。

もちろん家族には言えない話もあるし、家族だから言える話もあります。育ってきた環境から見える風景を当たり前だと信じて成長をしていきます。一人ひとりに個性があるように、家族もそれぞれの特徴があり、自分が感じている当たり前が他者にとっても当たり前かどうかは正直、わかりません。でも、これが当たり前なのだとな納得して生きていくことはできます。納得していたはずが、時を重ねる中で、諦めが変わっていたということはないのでしょうか。私たちは、自分のことを一番信じて欲しいと願うのは、家族なのでしょう。その家族の生活を守ろうとして、傷つく結果になっている人は意外と多いのではないかと感じます。だから、対人援助職が求められるのでしょう。

家族のことや自分の気持ちを上手く伝えることは難しいため、第三者が入って話をすることに意味が生まれます。第三者に話すことで、新たな視点に触れます。その時は、受け入れられない気持ちになるかもしれませんが、何か自身の中で引っかかっていれば、いろいろと考える時間が生まれ

ます。そこから新たな道筋が見えてきます。袋小路からは脱却し、新たな道筋を行けば、今までとは違う風景が見えてきます。その中でも、いろいろな事は起きるでしょうが、新たな道筋を探すことは経験していますから、どう乗り越えようかを考えていけるようになるのではないのでしょうか。

